

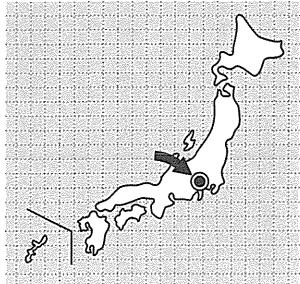
シリーズ

子どもが育つ  
場所から

# 一人ひとりを大切にする保育

元町幼稚園（神奈川県横浜市）

時代の流れや社会状況の変化を受け、戸惑いながらも、  
その時々に生きる子どもたちの「今」を見つめ、常に子ども  
も主体の保育を追求し、実践してきた元町幼稚園。  
保護者と連携し、楽しみながら保育をしているこの園の  
今の暮らしを届けします。



今号のレポーター

お茶の水女子大学附属幼稚園  
佐藤（文責）、伊集院、石川、灰  
谷の4人で訪問しました。降り  
しきる雨の中、気持ちよく受け  
入れてくださった元町幼稚園に  
感謝の気持ちでいっぱいです。

## 元町幼稚園を訪ねて

秋のある日、神奈川県横浜市にある元町幼稚園を訪ねた。ＪＲ根岸線石川町駅で下車し、おしゃれな元町商店街の中心部を右に曲がると、汐汲坂という急な坂がある。

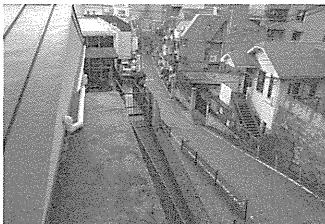
その日はあいにくの雨。坂道を行く私たちの前には、傘を差した男児が、おばあちゃんと手をつなぎながら歩いていた。

「今日は、雨だから外では遊べないかなあ」「お部屋でも楽しいことあるのじやない？」

幼稚園までの道のり

をのんびり歩きながら、今日一日何をしようかと思いを巡らせて いる様子が伝わってきた。

これから始まる元町幼稚園の子どもの時間、どんなドラマが待ち受



▲汐汲坂

けているのか、ドキドキしながら後を歩いた。坂の中腹まで行くと、「おはようございます」とさわやかな声が聞こえ、副園長の加藤先生が笑顔で私たちを迎えてくださった。

## 保育を見つめ直してきた歴史

元町幼稚園は、一九〇九（明治四二）年、私立横浜高等女学校の附属幼稚園として設立された。関東大震災で全校舎が焼失し、その後、中断期間があり、一九五七（昭和三二）年に地元の人々の要請で再開した、歴史ある幼稚園である。注目すべきなのは、再開園から今日までの五十余年、常にその時々の子どもたちの姿を丁寧に見取り、自分たちの保育はこれまでよいのだろうかと、研修を重ねてきたその姿勢にある。

再開園から二十年を経た一九七七年、それまでの行事中心・保育者主導の保育に対して疑問を感じ始めていた保育者たちは、何気な

く手にした雑誌『幼児の教育』の中に、「お茶の水女子大学幼児教育現職研究会のお知らせ」の記事を見つける。そして早速、毎週火曜の夜、横浜から東京まで、研修に出かけることにしたのである。

保育に対する疑問の声を最初に上げたのが、現場の若い保育者であったこと、保育が終わった夜に保育者全員で研修を受けることにしたこと、午前六時から八時までと二時間もの研修を受け、横浜までの帰りの電車の中で、保育者同士が明日の保育にどう活かそうかと考えを巡らせ、議論を交わす様など、興味深いその当時のことについては、『保育の見直し～1000日の実践記録』（大戸美也子・横浜学園附属元町幼稚園 フレーベル館）を参考照いただければと思う。

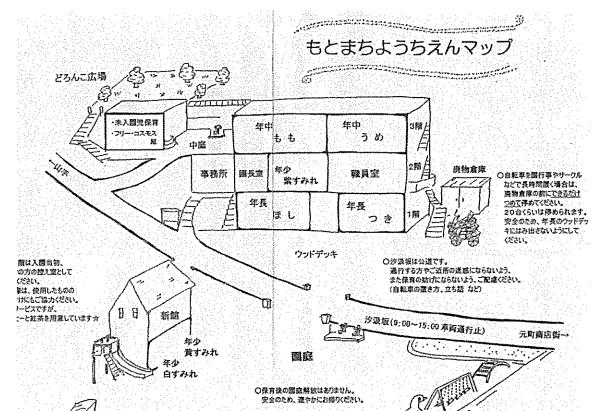
## 坂を挟んだ特徴ある園舎

元町幼稚園は、汐汲坂の中腹、坂を挟んだ

左右に園舎がある。坂を見上げた右手は三階建ての建物で、一階に

年長保育室が2つ、二階には職員室や園長室、事務室、そして年少の一クラス、三階は年中保育室2つが配置

されている。坂の左手に新館と呼ばれる二階建ての園舎があり、一階に年少のもう一クラス、二階は保護者の控室として利用できる空間がある。坂の傾斜を使つた造りになつてるので、通りからそれぞれの階に出入りできるようになつている。また、右手の奥には離れ



▲図1 元町幼稚園マップから

があり、未入園児の保育や預かり保育の部屋として使用しているとのことだった（図1）。

慣れない私たちはやや複雑に感じる空間だが、晴れた日には、子どもたちは、園舎の上下はもちろんのこと、坂を挟んだあつちとこつちを自由に行き交い遊んでいるようだ。坂はまるで幼稚園の敷地内のようだが、地域

の人の通り道でもあるので、子どもたちにとっても地域の方にとつても気持ちよく安全に行き来ができるよう、卒業生の保護者が交代で見守っている。

その日も雨の中、レインコートを着た親子が、坂の途中で足を止め、両側の園舎から聞こえる子どもたちの声に耳を澄ませ、「お兄ちゃんたち、遊んでるね」と話しながら歩く姿が見られた。

## 一人ひとりを大切にした保育

降り止みそうもない雨の中、登園してきた

子どもたちは、それぞれの保育室に向かい、身支度を済ませると、思い思いに遊び始めた。

最初に訪れた年中組では、三階の一「クラス」分のスペースをオーブンにし、製作、お店屋さん、ままごと、粘土、ブロック、積み木、線路遊びと、空間を分けて、子どもたちが好きな遊びをしていた。

皆が生き生きと動いている中で、大型積み木で作った乗り物の

中に入り込んで出てこない男児がいた。

表情もやや硬い。担任の保育者が様子を気にしながら声を掛け、他の子どもと一緒に、新聞で作ったハンドルやシートベルトを持ってきては男児に見せ、さりげ



▲年中組保育室

なくハンドルを置いて、その場を離れた。

少しして男児は、中から手を伸ばしハンドルを手に取ると、それを持ったまま、声を掛けってきた保育者とその周りにいる子どもたちの様子を目で追い始めた。そして、乗り物の中から自分で出てくると、保育者にトイレに行きたいことを伝えた。

トイレを済ませ、はみ出したシャツを保育者に丁寧に整えてもらっている時の男児の表情は、先程までとは全く違い、穏やかに和らいでいて、そのまま製作コーナーに行くと、周りの子どもたちに交ざり、製作を始めた。

この男児が、転園してきたばかりで、今日初めて幼稚園を訪れたということは、後から聞いて知った。初めての空間、初めての人の中で緊張する彼の気持ちを受けとめ、無理に誘うことなく、彼のベースで自然に遊びの輪に入していくことができるよう、援助する保育者の丁寧なかわりがそこにはあつた。

一階の年長クラス

では、女児二人が机に大きな布を広げ、

型紙を置いて線を引き、切り取り、レー

スやビーズをあしら

い、スカート作りを

していた。ボンドが

乾くように、保育者

は一つ一つハンガー

に掛け、窓辺にきれいに飾る。女児たちは自

分たちの作品がうれしくてたまらない様子で、

参観の私たちにも「素敵でしょ！ 私が作っ

たの」と声を掛けてきた。

その後、向かった年少保育室では、友達とのかかわりが楽しいことに気付いた三歳児が、紙テープの電車に乗り込み、保育室の中をあっちへ行ったりこっちへ来たり。途中テープが切れて保育者に修理してもらうのも



▲スカート作り（年長児）

うれしいようで、ケタケタ笑いながら数人で楽しんでいた。

三歳児、四歳児、五歳児、それぞれの育ちが無理なく保障されている空間であり、ほつとできる温かい時間が流れていった。

### 保護者とのつながりを大切に

行事を間近に控えた中での参観であつたにもかかわらず、保育後、話をする時間を設けてくださいました。今日一日の保育を振り返りながら、そして私たちも日ごろの保育に思いを馳せながらの話し合いになつた。保育の中での戸惑いや悩みを互いに語り合う有意義な時間となり、気付くと、日が落ち、薄暗くなつていた。

ている。このDVDが、共に悩み話し合いを重ねる中で幼稚園への理解を深めていった保護者作成のものであり、幼稚園で大切にしている思いを保護者が言葉にしてまとめているということを知り、驚いた。だからこそ、一つ一つの言葉に保育者自身が語るのとは違う説得力があるのだと感じた。その当時のことが思い浮かぶようで、DVDを見ながら涙ぐむ先生方に思わずもらい泣きをした。

幼稚期の子どもたちの「今」がより豊かなものであるよう、常に保育を見直し、子どもと保護者を支え、地域の中に位置付いてきた元町幼稚園。今回の訪問で、その精神は今なお、しっかりと受け継がれていることがわかった。

最後に幼稚園の紹介DVDを見せていただきいた。このDVD製作にも素敵な物語があつた。子どもたちの魅力ある表情や動きでいっぱいの写真に、わかりやすい言葉が添えられ

#### ◆◆◆◆◆訪問メモ◆◆◆◆◆

◆訪問時期：2014年10月

◆訪問場所：横浜学園附属元町幼稚園

◆〔住所〕神奈川県横浜市中区元町4-154

◆〔電話〕045-641-1330